週刊「考歴民（これみ）」Ｎｏ25　2021.9.13.
交野古文化同好会

考古・歴史・民俗の頭文字を取って考歴民（これみ）と名付けました。

=土地に刻まれた歴史=

「地名は遠い昔から使用され
しかも今もってわれわれの
生活の中に生きている」

地名　丹羽基二著

地名:倉治①

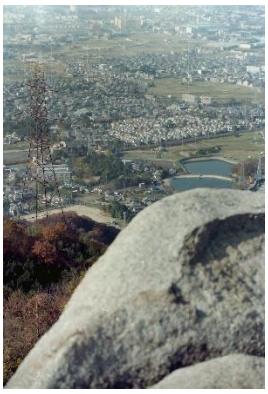
倉治という地名には、どのようないわれ、意味があるのだろうか。

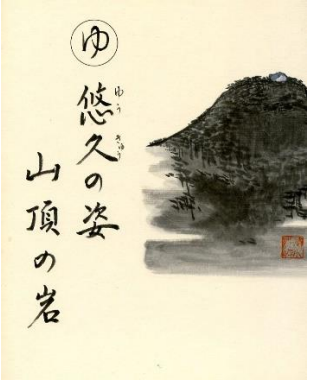
まず一つは「くら」とは、岩・岩場・崖といった意味がある。

他に倉庫や山の鞍部をいう。

交野山は巨岩が居座っている。

ふもとから朝日の昇る東を見れば、巨石が朝日の影になって黒々と、ますます巨大なものに映りはしないだろうか。





観音岩から倉治村

また、交野山の西側は断層によって急な崖をなしている。

その崖下に発達した集落から付けられたものだとするもの。

交野山から倉治村（昭和50年代）

二つ目は、文字どおりの倉（蔵）の林立する村であったとするものである。

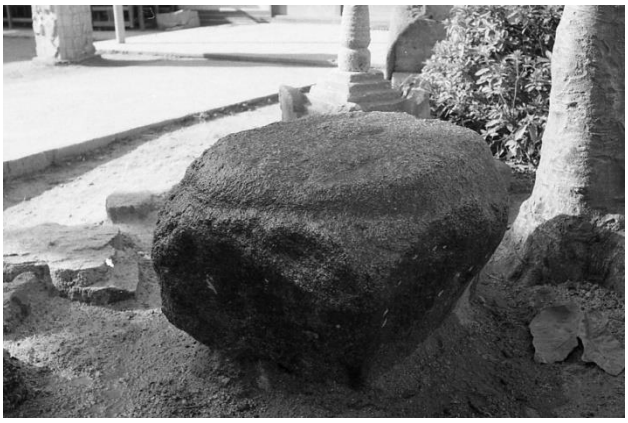
古代、津田から倉治、寺にかけて、津田山・交野山・竜王山のふもとにかけて渡来人が多数住んでいた。

その中で倉治は機織の技術を持った渡来人が多く住んでいた。

昭和23年空撮

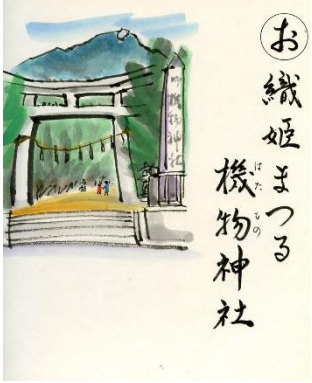
壬申の乱（６７２）が起こったとき、倉治に住む渡来人は大海人皇子側に味方した。

そして大海人皇子が勝利をおさめ、やがて即位して天武天皇となった。戦争の功労として天皇は倉治機物の首長に交野忌寸の姓を与えた。それから後、倉治機物一族は大いに栄え、聖武天皇の時代（天平年間、７２９－７４８）には神宮寺の東、交野山の麓に開元寺を建立する。



石仏の道で礎石発見（歴史民俗資料館中庭）

また、一族の氏神として機物神社を祀って、村の繁栄をほこった。祭神は、のちに転じて織姫星「たなばた姫」となった。このように、倉治が渡来人によって栄え、かれらの富を入れる倉が建ち並ぶ



三つ目は「日本書紀」巻三の神日本磐余彦天皇（神武天皇）の条に兄倉下・弟倉下の二人の名前が出てくる。大和に入った神武天皇が、兄磯城という悪い武将をさとすために弟磯城をつかわす。その伴に、兄倉下・弟倉下をつれていったというのである。

この兄弟は今の倉治に住んでいた豪族であった。この名前が地名になったといわれるものである。

参考:「日本書紀」巻三（解説）

神武天皇=神日本磐余彦天皇

神武天皇の治世 76 年と神武東征にかかわる 7 年を合わせた 83 年間のできごとを記している。

神武天皇は、国家統治の大業を国の中心で果たすべく、兄・五瀬命を首領として日向から大和に向けて東征に出発。瀬戸内海を進み、難波から胆駒山越えを策したが、長髄彦に敗れて五瀬命が死没。神武天皇は日に向かって戦ったことを非とし、熊野に上陸して西北に進むことに変更。荒坂津では丹敷戸畔を制したが、神の独気で失神した。

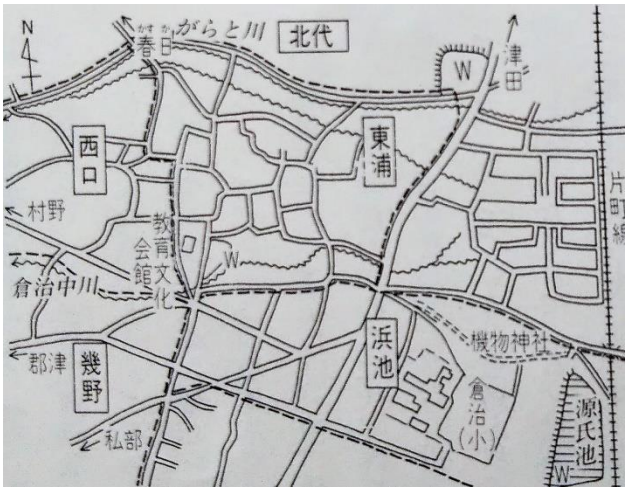
その危機を高倉下に託された韴霊（武甕槌命の化身）で切り抜けた。その後は頭八咫烏に導かれ、菟田兄猾の奸計も未然に対処し、国見丘・磐余邑・磯城邑・高尾張邑などの反抗を天香具山に尊ぶことで優勢に退けた。兄磯城を制して、長髄彦軍と再戦。

長髄彦も天神の子を擁していると正当性を主張するが、天孫を優勢するとした饒速日命に見放されて滅亡した。さらに奈良盆地の北辺まで平定し、革命年といわれる辛酉年に磐余宮で始馭天下之天皇として即位した。以上の大和王権の創業譚を記したのち、論功行賞や地名の由来譚が述べられている。神武東征がなぜ日向から発するのかの諸説あり、邪馬台国の東遷や応神天皇の東征譚の反映かなどという。

歴史読本 2013.4　日本書記の構成を読むより

東浦（ひがしうら）

「浦」は「裏」の意味であろうか。
ほかに畑、川の上流や先端、方角の北を指すといった意味もある。
今の倉治の集落は機物神社辺りから西に集まっている。
東浦の地域は、教育文化会館（旧、交野町役場）辺りから東へ、源氏滝近くまで広がっている。
集落の半分を包み込んだあとはすべてといってよいぐらい畑作地であった。
ただ松塚上池、下池より下は水田がある。
関西電力枚方変電所辺りの扇端部にして、北にがらと川、南に免除川があって、その間に挟まれた扇状地性の土地である。
倉治の集落の裏（東側）を開いて畑作地あるいは水田としていったものと考えられる。



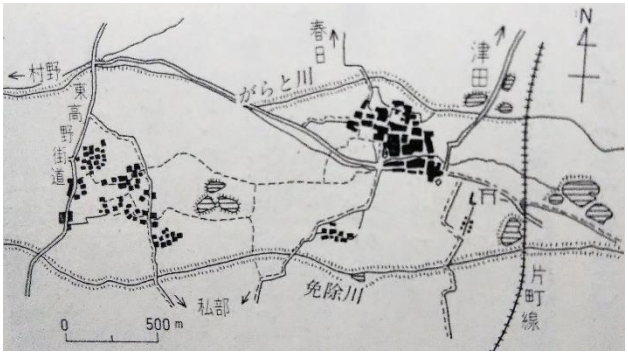
倉治の集落と小字名

北代（きたしろ）

倉治の集落の北を東から西に流れる「がらと川」の北側一帯を指し、東は大阪府警察学校（移転）の東の山麓部から、がらと川に沿うようにして西は郡津との境、村野浄水場近くまで細長く続いている。
「代」は普通「しろ」である。
「しろ」は二通りの意味があって一つは耕地の区画を示す場合があり、もう一つは田畑の面積の単位として古代律令社会以前に用いられていた。
その場合「頃」の字を用いたが、収穫量を基に田の面積を測ったが、一代（頃）
は稲一束（当時の米５升、現在の米２升）に相当し、高麗尺で短辺６尺（約２．１３m）、長辺３０尺（約１０．６８m）の長方形の面積であった。
しかし、倉治の北代の「代」は「台」の意味、すなわち倉治の村の北側の台地という意味ではないかと考えられる。
北代は山の麓の方から北代の１～北代の７と下に向かって付けられているのと、山の麓の部分は倉治の集落よりがらと川の扇状地の扇頂部に位置するところから、相当高い位置にある。
それゆえ山の麓の高い部分は畑として、西の低い部分はがらと川の水を引いて水田として開いていったことが伺える。

西口（にしぐち）

「何々ノ口」という地名は防御集落や環濠集落によく付けられる。
村の出入口を指している。西ノ口は倉治から郡津、村野への出入口であろう。
教育文化会館の西から倉治への道、南西から郡津への道がある。郡津へは郡津三つ池を経由して行く道であり、一方、村野へはがらと川沿いに北川へと堤防沿いに西へ行く。
北へは春日と津田への道、南へは私部道がある。
倉治は明治２０年測図の地形図を見てみると今の村からの出口の道の様子がよく分かる。



郡津・倉治の集落と連絡道路（明治20年当時）

それと倉治の集落は一ヶ所に固まっている。
集落内の道路が非常に入り組んでいることなどから防御を主体とした集落形態であることが理解できる。

浜の池

旗物神社の東、ＪＲ学研都市線に沿う形で源氏池がある。

この大きな池、昔は二つに分かれていた。
北半分を「宮田池」、南半分を「浜ノ池」と呼んでいた。
小字名の浜ノ池はこの池に由来している。
「浜」は砂浜海岸の意味が普通であるが、土堤とか崖といった意味もある。
海岸に関係ない内陸部でも浜の付く地名が見られる。これは堤防、崖といった相当の高低差を持った所に付けられているのである。
浜ノ池はかんがい用の池として造られた。
旗物神社の方（西方）から望めば、池の堤防が相当高く見られる。
その水を下の田はもらっているのだから、その範囲の所を浜ノ池と付けられたと思われる。

参考:交野便り

戦地の兵士と地元からの近況報告(第三号・昭和16年８月廿日発行)「瀧と桃の倉治より」から。
想い出して下さるでしょう、今年も桃と瀧の侯となりました。ポツポツ桃の走りが出掛けました。
松の樹立と櫻の林を通りこして平和な瀧の冷気を味える頃になりました。
浜の池の北側に大きな池が掘られまして水量は前の二倍になりました。工費４万５千円これで倉治の沼も一段と強味を増すことになりました。
その名も源氏池、なみなみとした青い水面なんとも言えない美しさです。
休暇地一町二段の耕作が始まりました。増産の力強い歩みは立派に国策に沿って居ます(一部抜粋)

【参考書物】交野市史(民俗編)
わがまちふるさと地名をたずねて